

医療機器研修の実施 —国立病院機構南岡山医療センターでの実際と工夫—

笠井 健一[†]第69回国立病院総合医学会
(平成27年10月2日 於札幌)

IRYO Vol. 70 No. 11 (450–452) 2016

要旨

医療機器研修だけが特別ではないが研修を実施する場合、主催者・受講対象者・研修環境等条件はさまざまである。その中で意味ある研修を行うためには、事前準備の段階で主催者の考える到達目標、受講対象者の研修前理解度のズレを把握し研修の難易度を適切に設定することが重要だと感じている。また到達目標に対し不足するものがあると考えた場合には、回数・時間等の変更を主催者に提案し、単に研修を行うことが目標とならないよう積極的に研修の構成に参加していくことが必要な場合もあると考えられた。研修時には想定している受講者の理解度を踏まえ、反応を見ながら使う単語や言い回しに注意する必要がある。研修終了後には受講者とコミュニケーションを図り、研修の問題点の洗い出しと同時に受講者の疑問解決を行い、お互いの今後につなげられるよう努力が必要だと感じた。研修後アンケートやテストは研修理解度をはかるには重要だと考えられる。それらに加え研修後に臨床で研修内容に準ずるトラブル等が生じた場合には可能な範囲で受講者と対応を行い、研修と臨床を融合させ1つでも多くの「わかった」を得られるよう工夫することも重要と考えられた。

キーワード コミュニケーション、到達目標、研修前理解度

はじめに

国立病院機構南岡山医療センター（当院）臨床工学科では、院内新採用者・全体研修、グループ主催の新採用者専門分野研修や本部主催研修医対象の研修など、経験年数・職種・人数・時間・実施環境などさまざまな研修を行う機会を得て実施している。これまでに実施してきた医療機器研修等での経験と工夫を報告する。

研修前

研修準備として主催者等と各種打ち合わせを行うことが必要となる。この準備が研修を充実させるために重要な工程だと考えている。主催者としては各病棟勉強会係から医療安全・教育研修部門などさまざままで、同じ主催者・医療機器であっても受講対象者や時期により到達目標が異なることがあった。たとえば新採用者に対する教育研修部門等からの

国立病院機構南岡山医療センター 臨床工学科 [†]臨床工学技士
著者連絡先：笠井健一 国立病院機構南岡山医療センター 臨床工学科 〒701-0304 岡山県都窪郡早島町早島4066
e-mail: kasai.kenichi@momc.jp
(平成28年3月1日受付, 平成28年7月8日受理)

Implementation of Medical Equipment Training: Actual and Ingenuity in NHO Minami-Okayama Medical Center
Kenichi Kasai, NHO Minami-Okayama Medical Center

(Received Mar. 1, 2016, Accepted Jul. 2016)

Key Words: communication, attainment target, the intelligibility before training

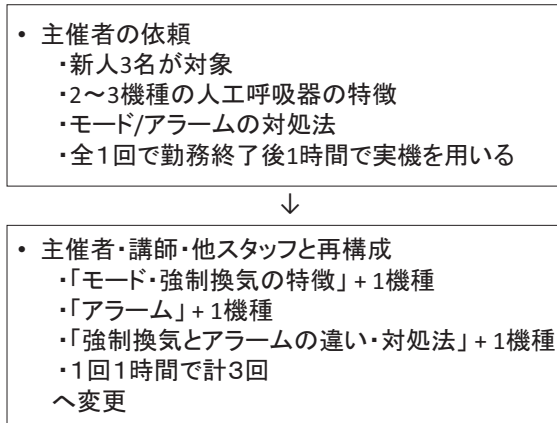


図1 主催者研修案からの再構成例

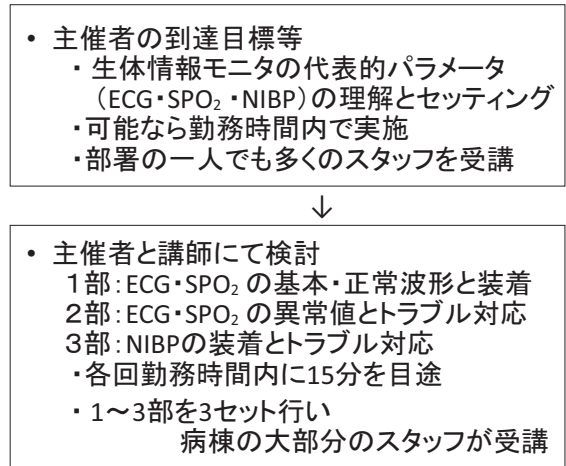


図2 到達目標・実施条件からの研修構成例

依頼の場合、基礎的な医療機器の原理と使用方法に重点が置かれることが多かった。しかし同じ主催者・医療機器であっても3年目以降などのスタッフが対象の場合、トラブル対応などに重点を置いた実践的な知識・技術向上を目標とされることが多かった。そのため1つの基準として受講対象者の経験年数を参考に研修内容の調整を行った。

しかし病棟単位などの少人数研修では受講対象者が絞られていることが多いため、主催者の意向をふまえながら直接受講対象者にヒアリングを行い研修前理解・習熟度により研修内容等を調整しよう心がけた。このように部署・受講対象者が絞られている場合、経験年数のみで研修内容を調整してしまうと問題が生じる場合があった。それが臨床経験年数と部署経験年数の違いであることが多かった。医療機器研修だけで問題となるわけではないが、病棟や診療科により必要となる専門知識が異なる。そのため同じ臨床経験年数でも部署経験年数が異なると理解・習熟度が大きく異なる場合があった。よって受講者が少ない場合にはこの点にも重点を置き内容等の調整を行った。

また研修に使用できる時間も研修内容に大きな影響を与える場合があった。参加人数の多い研修では「研修だけ」の時間として長時間を使用できることが多かった。それに対して参加人数が少ない場合、少数精鋭の専門分野研修やチーム会のような特別な場合をのぞき使用できる時間は「すきま」時間的な短いものになりがちであった。研修だけで長時間を確保できる場合には、医療機器に関して基礎から応用まで一連で研修を行いやすい反面、受講者の集中力が散漫となる場合が多いと感じた。また逆に短時

間の場合には内容を基礎から応用まで一連で行うことが難しくなる、反面他の業務を並行して行っていなければ集中力はある程度保てる場合が多かった。長時間の研修では中だるみ対策として休憩や実習を入れることである程度問題を改善できる場合があった。しかし短時間の研修では希望する研修項目をどのように行うかが問題になることが多かった。

当院臨床工学科では講師側の負担は増加するが、希望研修項目をすべて実施できるよう「基礎編」「応用編」「トラブル対応編」などと研修を複数回に分けて行うことを提案するようにしている。その際各研修の間隔が空く場合があるため「応用編」時には「基礎編」, 「トラブル対応編」時には「応用編」の復習を行うことにより細切れになった研修を少しでも一連に近づけられるよう構成を行った。条件にもよるが研修に長時間取れる場合でもあえて研修を複数回に分け1回の時間を短く、なおかつ各回で予習・復習を行えるような内容として、少しでも理解を深めやすくなるような構成を提案し実施することも多かった。

医療機器研修の場合、知識とともに実技の習得を求められることが多かった。そのため主催者の考える回数・時間・到達目標を理解し、受講対象者の理解・習熟度もできるだけ詳細に把握できるようにコミュニケーションをとり研修の構成を可能な範囲で調整することが多くあった。その結果、当初主催者が考えていた回数・時間・構成等から変更となる場合があった(図1, 2)。しかし1人でも多くの受講者が目標に達することができるよう、時間はかかるが積極的にコミュニケーションをとり研修の準備を行っている。

研 修 時

講師として研修を進める際、対象医療機器を受講者全員で見て触れることが可能な小規模とそれ以上の大規模かで、重点を置く点を多少変えている。小規模な研修時には、医療機器を使い多くの受講者に直接操作等をしてもらうよう構成した。また実際によくおきるトラブルなどを再現し、機器の動作や特徴を見て・聴いて・触れて体験してもらい少しでも多く印象に残るよう研修を実施した。大規模な研修時には実際におきたインシデント・不具合を題材に、少しでも実際の業務と結びつけられるよう研修を実施した。また多くの部署から寄せられる質問を題材に取り入れるようにも心がけた。

大規模な研修においても実習を充実させたいという希望が主催者より寄せられる場合があった。このような場合には研修の始めに座学で実習の予習を行い、医療機器を複数台・講師を複数人配置し小グループに分け座学の復習という形を取りながら実習を行うようにした。実習では各講師や受講者の着眼点により各グループで実習内容に違いが出る等の問題が生じることがあった。そのため座学で到達目標を明確にし、実習時内容の差が少なくなるよう構成し実施するようにした。また研修会の規模にかかわらず臨機応変な対応となるが、受講者の反応を見ながら説明に用いる単語や言い回しを工夫しながら行うよう心がけた。

研 修 後

次回研修につなげていくために、研修後アンケートが実施されることがある。受講者の感想・情報を得ることができ非常に有効な手段の1つとして取り入れられている。それ以外として当院臨床工学科では積極的に研修後受講者等に話しかけ感想や疑問点を聞くようにした。これを行ったことによりアンケートで具体的に得にくい説明不足・難しい表現の洗い出し、受講者の疑問解決を同時に行い双方の問題解決ができ重要なことだと実感できた。小グループに分けて研修した際には関係した講師陣とも情報交換をし、次回講師を依頼する際の改善点などを共有するようにした。また次回につなげるという意味では主催者の満足度も確認し、類似した研修を行う際の企画立案時にお互い役立てられる点がないかを探るようにもしている。研修理解度確認のためにテス

トを行うこともあるが、目標到達を客観的に図るものとして重要だと認識している。しかしテストの点数が良好でも臨床でトラブルに必ずしも対応できるわけではないとも感じている。所属する施設で研修会を行った場合に限定されてしまうが、研修後通常業務を行っている際に研修に関連したトラブルやその前段階などがあった場合には、臨床に迷惑がかからない範囲で受講者等に声をかけるとも対応し、研修と業務を結びつけてもらい少しでも生かしてもらえるよう常に努力を行っている。

最 後 に

現在必須の医療機器研修等¹⁾もあり、研修の需要はますます増えていくことが予想される。研修を行う場合には、準備の段階で主催者の希望する到達目標と、受講者の研修前理解・習熟度のギャップを正確に把握し研修を構成していくことが重要だと考えられた。また主催者・講師・受講者と研修に関わるすべての人が同じ時間を共有するとともに消費している。そのため研修をすること自体が目標とならないよう、少しでも研修内容が記憶に残り実践でき、研修で得たものを臨床へ還元できる内容とする必要があると感じている。病院勤務の臨床工学技士として院内研修に今後も積極的に関わり実施していくと思うが、院外の研修ではフォローしにくい実際の業務と研修を上手に融合させ、使える・ためになるものとなるよう今後も努力していく必要があると感じている。また1つの研修に関わる各関係者は受け身ではなく、積極的にコミュニケーションをとり全員で研修会を作り上げていくことが重要だと考えられた。

〈本論文は第69回国立病院総合医学会シンポジウム「よりためになる研修会って?～正しく安全な医療機器の取り扱いを目指して～」において「当院での医療機器研修の工夫」として発表した内容に加筆したものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。

[文献]

- 1) 「良質な医療を提供する体制の確立を図るための医療法等の一部を改正する法律の一部の施行について」医政発第0330010号 厚生労働省医政局長 平成19年3月30日